Osaka University Knowledge Archive

Title	呉山社と酒井君
Author(s)	中川, 幸三
Citation	懐徳. 1978, 48, p. 34-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90564
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

吳山社と酒井君

中川幸三

故酒井全太郎君の寄稿にかゝる懷德第四十五號所載「吳山社と吉田先生」で、吳山社のことは、大體、知られる。

尙吳山社に關しては

一、吳山社詩文稿　抄本四冊　吉田北山先生

一、吳山社謄錄　ガリ版刷四卷

一、吳山社例會　自第一回至第七十三回　池田太陽月報所載

があり、或る期間の活動は記錄されているが、同人の殆どが歿くなられて、酒井君こそ生存最後の人であったろう。此人に依って吳山社の雅集の數々の見聞の詳細を筆にして置いて貰うと希いつゞけて來たのに早く歿られ、すべて夢に終って憾みに堪えない。

抑も重建懷德堂では詩文制作の課程はなかった。然る處昭和五年、池田市に於て吳山社の結集が企てられ、首倡には吉田先生、岡山先生等があった。その奬めもあって堂の聽講生も前後して八人程が加盟、弟子入して、初歩から指導を仰ぐこととなった。全く懇切周到な手解きを蒙って皆進境著しかったと聞いている。

堂からの入門者第一番は酒井君で、（その他は一年前後遲れている）。例會第二回の聯句の中に早や鳴谷酒井の名が見えている。第一回は首倡の五人だけ故、入門第一期の中に入ることになる。

吳山社例會では講演、課題文、詩及び席上聯句が開かれていたが、第十回に至って初めて席上詩題が課され、次いで第十一回の課題文に「酒井完叔字說」が見える。後掲の「甫說集」五篇は、この時の作と思われる。

第十三回例會に「夏淺」の課題詩に鳴谷の作詩が初めて載った。實に昭和六年五月十日である。

この例會は、初回より回を重ねること七十三、昭和十一年十二月十三日で記錄が絕えているが、この間に、聯句を除き鳴谷酒井君の作詩約五十篇餘を記載しているから恐らく精勵第一者であっただろう。

後掲の假題「鳴谷遺稿」はこの頃の作詩を採摭したもので、採錄の責は私にある。

吳山社の記錄は、太陽月報の廢刊と、謄錄も後刊がなかったらしい。池田市の林田良平氏にその續篇のことも尋ねたが、四卷で絕えているとのことだ。

今年五月は酒井君歿後一周年に相當し、同家では、大阪市南田邊の名刹、法樂寺に於て法會が營まれ、塋域に新しく墓碑が建てられた。

町中とは見えぬ閑寂な境內、寺歷を語る巨樟の蔭に立つ碑の面に光嚴院廣智良謙居士の法諡も鮮やかに拜され、堂友二三子は坐ろ哀惜の念新にして暫し去り兼ねた。

鳴谷遺稿、甫說集は假に册子に綴り、此の日故人の靈に捧げ、以て供華に代えたものである。

甫說集

子謂衞公子荊善居室始有曰苟合矣少有曰苟完矣苟謂聊且安意說者曰方其始有之時在他人雖合而猶不以爲合矣既而少有也在他人雖完而猶未以爲完矣則曰苟合矣苟完矣凡宮室田園服飾錢財與凡百器具任意蓄積期至其完乎雖盡身命無所底極求之不已則雖積財至億不以爲足安能不失德汙名以至死是故處世之要在知足當未合之時宜以爲合當未完之時宜以爲完如此則居心平安不期其完而克完矣酒井生以全爲名夙志于學遊于懷德堂又研文於我吳山社其於學問文章亦期完全者也然人非聖者不特道德不得全卽學問文章亦何得完得苟完斯可矣生請字之曰社中命曰完叔其讀書之室題曰苟齋有所以自規亦可矣則名實得倂完

昭和辛未五月　　中井天生成文甫

昭十五年晉師圍鼓三月鼓人或請降穆子見其民曰猶有食色姑修而城軍吏曰獲城而弗取勤民而頓兵何以事君穆子曰吾以事君也獲一邑而敎民怠將焉用邑邑以賈怠不如完舊初鼓人或請以城叛穆子弗許使鼓人殺叛人而繕守備後鼓人告食竭力盡而後取之克鼓而反不戮一人軍吏之見萬人所行曾不及許其叛主以降則敎我國人令其外叛穆子獨能完舊好惡不愆誠可獲而民知義所蓄志於世者當則以行焉無以復加所濟也備中酒井生名全太郎請字於余余望其世有卒者厚也因取穆子之言字之曰完叔生行二

昭和辛未九月　　岡山源六

酒井君鳴谷名全字曰完叔備中鳴谷人也余初不知其人嘗一見於懷德堂而未知其爲人庚午夏同人結吳山社君亦來

會爾來相共論文評詩君常默默然如不能言者興至則莞爾而笑耳余始知其爲人君資性敦厚締交愈深而情好愈淡其如不能言者自抑遜而守禮讓不欲與人爭論也其言多而無益者其言也妄其言少而有德行者其人也完君以三餘之暇讀古人書而常養德樂道蓋可謂得完人之意矣字曰完叔有以哉

昭和六年九月念一日　　吳　林　翠

完亦謂之全無缺之謂也夫周公孔子古之完人也周公吐哺握髮以待天下之士欲取於士以補闕也孔子曰若聖與仁吾豈敢然則周公孔子未嘗以完自居也酒井生名全太郎以完爲字則無以完自居乎或解曰鶴脛鴨脚雖長短不齊各得其完若合天下之智能然後始可謂完則雖周公孔子猶有所缺然則天下遂無完人也完叔之自名以不完爲完非以完爲完也或又解之曰天下既無完人完叔豈以完自居乎完叔之完以見其志也完叔自視謂不完故孳孳自養將自至於完也余謂飲食衣服爵祿田宅人常憂不足歆然自視爲不完完叔宜以不完爲完仁義道德學問材藝人常以爲足果然自視爲完完叔宜以完爲完以不完爲完則常足而無不完以完爲完則常不足而將以至於完余未知完叔所以命字然而其爲人謙虛好學則余知其遂勉而得完也

昭和七年七月　　西　田　　長

凡人求完全非容易之功苟欲爲道德純備之人必須其志嚮之專且篤然後見賢思齊見不賢而內省焉完何不得振起曰舜何人哉我何人哉焉全何不得志於道者專且篤若是也則能高尚其志道德以備矣然升高自卑行遠自近者聖人之敎也故修德砥行循序勇進以求爲聖賢則日就月將者將不惟克已復禮雖或未能達於聖賢之庭亦足以含弘光大矣昔者吳康齋平生處於貧賤寒餓之境夢寐希聖賢而不輟乃發憤惕厲敢從實地用功銖積分累次第而進遂爲一代鉅儒曾滌生戒兒曰凡人多望子孫爲大官余不願爲大官但願爲讀書明理之君子可謂至言矣孟子曰服堯之服誦堯之言行堯之行是堯而已矣服桀之服誦桀之言行桀之行是桀而已矣爲善爲惡皆在我不與天命相干涉古來英豪所以孜々翼々終身弗懈焉同社酒井生名全頃問字於岡山子本子本乃字曰完叔謀爲之文按說文云完全也全完也互訓義相同然則全人又謂完人亦可蓋子本命意亦在使生爲全人生其顧而念之以成其志

昭和七年十一月　　北山吉田銳雄